包種茶史

(株)伊藤園中央研究所*

竹尾 忠一

(平成13年2月20日受理)

History of Paochung Tea

Tadakazu TAKEO

ITO-EN CO., Central Research Institute

Sagara-cho, Haibara-gun, Shizuoka-ken, Japan

1 はじめに

福建に行き奇異に感じたことは、包種茶の話をする時、多くの人はそれに興味を示さないばかりか知識も無いことと、茶関係者からは包種茶というと台湾包種茶のことかという返答が返ってきたことである。

中国茶経¹を見ると包種茶として台湾包種茶が記載されていて、烏龍茶の項には包種茶の記載はなく、そこから包種茶の起源由来を見付けることは難しい。そこで福建省安溪での包種茶誕生と台湾での包種茶発展の経緯を調べてみることにした。

2 包種茶の始まり

福建で生まれた包種という茶の名称は、新しく造られた茶種を指していたのではない。それは多くの通説が物語るように19世紀中期福建省安溪の茶商王義程が、自商店販売銘柄の1つとして、烏龍茶四両、150gを方形の四方包みの紙袋に詰め、その表面に茶名‘包種’と印刷して売り出したのが始まりで、その形態

から「四方包」という別称もある。

当時、“中国発酵茶”‘Bohea (福建北部武夷山地部族が生産する発酵茶)’が大量に広東からロンドン市場に送り出されていて、福建茶業はみぞうの好景気の時代であった²⁾。Boheaの産地は始めは閩北地方であつたが、やがて交通輸送に便利な閩南地方に主産地が移動し、さらにBoheaの製造方法が改良されて、外觀、香味に勝る烏龍茶が閩南地方で造られ、現在の中国烏龍茶が誕生した。

これには一重に品種選抜の成功が大きく貢献していた。代表的中国烏龍茶「鉄観音」の原料となる品種‘鉄観音種’が、安溪県西部“内安溪”を囲む山中の茶畑から選抜されたのは18世紀中期といわれている³⁾。これが中国における品種選抜の最初の成果の1つであり、また同時に無性繁殖法による品種茶普及の始まりといえる。その後19世紀中期にかけて続々と烏龍茶用の品種が閩南地方で誕生してくる。これら品種の特徴は茶芽を発酵させると品種特有の強い花香が形成され、それが烏龍茶の香味を一段と高めるのに貢献した。

* 〒421-0516 静岡県榛原郡相良町女神21番地

Boheaは閩北地方、とくに武夷山脈の山腹に植栽されている喬木性大葉種の茶葉を原料としていて、造られた茶は花香に欠け、そのため火香を強めて香味を補っていた。これにたいして安溪で選抜された品種は、発酵茶とすると強い花香が生まれてくる。‘鉄観音’の持つ特徴的花香は、茶香気成分中にネロリドールというテルペンアルコールを豊富に含んでいることによる⁴⁾。

他方、19世紀中期釜炒茶の香味改善という目的で着香茶が誕生し、北京で好評を博した。これが現在の茉莉花茶（ジャスミン茶）の誕生である。ジャスミン茶は釜炒茶にジャスミンの花香を着けて造られる茶で、19世紀末福州地方がジャスミン茶製造の中心地であった。

さて前述のようにBoheaはロンドン向け商品として成長して来たのであるが、これが1840年の阿片戦争を境として情勢が大きく変わり、中英関係の悪化とインドでの紅茶生産の開始等が重なり、Boheaのロンドン向け販路が失われて福建茶業は壊滅的な打撃を受けた。そこで烏龍茶（19世紀代中国茶業界にはBoheaという茶銘柄は無く、紅茶の内に下級品として烏龍茶＝Boheaが分類されている）の販路として東南アジアの華僑向け貿易が開拓されたが、その販路拡大のために烏龍茶に花香を着けて、華僑の嗜好にあう茶としようというわけで、ジャスミン茶をまねた着香烏龍茶（花香茶）が作られ、アモイから東南アジアに輸出された。これが福建包種茶の由来である⁵⁾。

3 台湾古茶

台湾茶樹の起源は明代初期に溯るという説があり、この茶は“蒔茶”といわれている⁶⁾。また台湾中南部山地の眉原山には野性茶樹が自生していて、これは樹高18m³に及ぶ樹齢100年を越える喬木性の大葉種（assamica）の茶樹である⁷⁾。また福建省農業科学院茶葉研究所編著「茶樹品種志」にも‘台湾大葉種’が登録されていて、これも喬木性大葉種に分類されている⁸⁾。

これらの古茶樹を利用した島民による飲茶の記録は無いが、台湾茶史に「1620年頃アモイの住民が台湾に移住して来て、彼等は好んで茶を飲んでいた」という口伝が記載されているのと、1645年オランダによる台湾占領時代バタビヤ城中日記に、台湾茶の記録⁹⁾が見られることから、17世紀には福建からの移住民による、茶の生産と飲茶の習慣が台湾に伝わっていたと考えられる。

4 福建からの茶樹渡来と烏龍茶の生産

台湾への中国本土からの茶樹の伝来についての記録は、嘉慶時代（1796-1820）に「在台灣的中国人（柯朝）が福建から武夷の茶樹を持ち帰り、これを鱗魚坑に植えたところ良く生育し種子2斗を得てこれをまき増殖した。」という記録が始まりである⁹⁾。また陳培桂纂修（1871）淡水庁志には「石碇，文山（拳山）の住民は茶栽培製造を行っていたが、道光年間（1821-50）福州の商人が来たりて大陸伝来の茶種子を蒔き繁殖させた。これを総称して蒔茶という。」とある¹⁰⁾。台湾の在来種に蒔茶または時茶というのがあるが、蒔茶とは19世紀前からの実生繁殖で増殖されていた茶樹を総称していると考えられる。

19世紀後期台湾で造られていた茶は福州由来の烏龍茶で、島内中国人（福建人が主であるが）の消費のほか一部の茶が福建に送られていた⁵⁾。本格的に烏龍茶の生産が台湾で始まるのは、1858年天津条約で安平港と淡水港が国際通商港として開港してからである。

1865年 John Dodd（英国、茶商）は台湾が茶栽培適地であることに着目し、5年間かけて安溪から大量の茶苗を持ち込み北投、桃園、竹園、苗栗各県に植栽するとともに、福州から烏龍茶の精製加工技術を導入し、1869年には製茶工場を台北に建設した。そして1872年には台北に5社の茶輸出商社ができ、台湾茶の本土及びアメリカへの輸出が順調に伸びていった。当時の主な茶産地として台湾北部の新竹、七星、文山があげられる⁵⁾。

5 包種茶の生産

台湾の烏龍茶の生産が1870年代から急速に進んだことと、世界経済不況のあおりを受けて輸出不振がかさなり、台北茶市場には茶が滞貨して茶価は低落した。そこで烏龍茶を福州で着香して、東南アジアに輸出するようになった。これが台湾包種茶の始まりである。1881年になると泉州の呉福源、安溪の王安定、張古魁等が来島し包種工場（着香工場）を建設し、ここで着香した着香烏龍茶をアモイ経由にて南洋に輸出した。

1885年台湾が日本領になって早々、安溪の王水錦、魏静が来島、台北南港大杭にて茶栽培と包種茶製造を始めた⁹⁾。この時代台湾で主に造られていた烏龍茶も花香茶でこれを裏づけけるものとして、台湾茶業界誌「台湾之茶業」には昭和10年代迄、茶況のほかに花茶製造用料花の市況が載っている。

1895年台湾が日本領土と成つてからは、台湾総督府は茶業試験場を設立して台湾茶業とくに烏龍茶の発展に努力した。台湾茶業は福建の優良品種、‘青心烏龍’、大葉烏龍、鉄観音等を、茶樹生育に適した土壌、気象条件の新開地に植栽したことと、新しい農業技術の導入もあって短期間で茶園形成に成功した。こうして20世紀始めには7,500tの烏龍茶をアメリカに輸出するようになり、その輸出量は中国本土を凌駕するまでに成長した。しかしその後ジャバ紅茶がアメリカに登場するにおよび、台湾烏龍茶はアメリカ市場を失い、また南西太平洋で戦時色が強まるとともに台湾茶の輸出が低落していった。明治末から太平洋戦争迄の、台湾での茶の生産統計を示したのが表1である。

6 台湾包種茶

現在台湾銘茶として有名な、文山包種は何時頃誕生したのであろうか。大正末、1923年の「台湾之茶業、12巻、6号」を見ると、「最近着香しなくとも芳香を持つ包種茶が造られるように成つた。」という記事が載っている。これから見て台湾では1920年代初めに着香し

ない包種茶が試作されたものと考えられる。この試作に貢献したのが前出の王水錦（1923没）といわれている。

包種茶と烏龍茶の製造工程は基本的には変わらないが、両茶種間には発酵程度に差がある。即ち前者は後者よりも発酵度が低く、前者の外観は青緑色を帯び、後者は褐色である。液色は前者は黄橙色、後者の液色は濃い橙色である。この発酵度の差は摘採した茶葉を先ず日干する際の時間の長短、その後陰干している間の茶葉の手による攪拌揉捻程度の回数と強弱に由来する。なお発酵程度を茶タンニンの酸化程度であらわすと、文山包種：8～20%、凍頂茶：20～30%（以上台湾包種茶）、台湾鉄観音：30～40%、台湾烏龍茶：50～60%といわれている。このような発酵度の低い半発酵茶が作られたのは、発酵初期に茶葉から馥郁とした花香が生まれてくることに農民が気づいたことによる。

この包種茶創製の成果には茶品種選抜の努力が大きく寄与している。1910～1917年にわたり総督府草湊坡茶試験場（平鎮試験場の前身）で、早生種‘大葉烏龍’、硬枝紅心’、中性種‘青心大有’、晚成種‘青心烏龍’を中心に、その他台湾で栽培されていた茶樹を集めた栽培、製茶試験が行はれている。その後これら試験品種の中で栽培農家に広く普及したのが、台湾包種茶最適品種としての‘青心烏龍’と‘青心大有’で、1994年には台湾茶園21,241haのうち、前者が48%、後者が19%を占めるに至っている。

‘青心烏龍’は灌木性中葉種で、安溪が原産地で台湾には早くから導入されていた品種である。‘青心大有’も灌木性中葉種で、台湾文山の茶畑から選抜された品種である¹⁰⁾。‘青心大有’の選抜母樹についての記録は未詳であるが、19世紀中期安溪から導入され文山で植栽された青心系統の実生茶樹群の中から農民の手で選抜されたものと考えられる。これらの品種から包種茶を造ると、芳香成分であるリナロール、ゲラニオール、2-フェニルエタノール、ベンジルアルコール、ジャスミンラクトン等の花香成分を大量に生成し、高い花香が

生まれてくる⁴⁾。

このように台湾包種茶は1920年代に創作されたが、当時は廉価な花香茶の生産と輸出が台湾茶業界の最大の課題であり、また間もなく太平洋戦争も始まり、しばらくは茶業界からその存在を忘れられていた。やがて1945年台湾が中国復帰し茶業が再興されてから、文山包種、凍頂茶として日の目を見るようになった。その後台湾茶業は幾多の変遷を繰り返し、現在では台湾茶は島内消費を中心とした状況で、生産される茶種は烏龍茶が殆どである。そのなかで台湾包種茶は台湾銘茶として台湾茶業に重要な地歩を築いている。一方花香茶の生産は現在行はれていない。

7 結 言

包種茶は安溪でまず着香烏龍茶（花香茶）として生まれ、主に南洋向け貿易品として生産された。その後台湾茶業が成長するとともに、海外での烏龍茶に占める台湾茶の比重が増大し、福建では着香烏龍茶の生産は停止した。一方台湾では福建に代わり着香烏龍茶が生産されていたが、烏龍茶の生産改良の過程で、高い花香を持つ茶の製造に成功し台湾包種茶が誕生した。現在台湾の茶生産と消費は烏龍茶が主体で、そのなかで香味に優れた台湾包種茶は台湾銘茶として広く知られるようになった。

表1 台湾茶統計

年 度	烏龍茶	包種茶
1900	7,051 t	1,313 t
1920	2,880	3,779
1926	4,790	5,389
1930	3,179	4,626
1940	1,487	2,326

(台湾輸出百年簡歴, 1965)

業改良場研究員（秘書）徐英祥氏に、文献の収集にご協力頂きましたことを記して深謝いたします。

8 文 献

- 1) 陳宗懋主編 (1992)：茶類篇，中国茶経，上海出版社（上海），p.121, 235.
- 2) 竹尾忠一 (2000)：紅茶の起原，茶研報 No.89, 59-63.
- 3) 蔡盛林総編(1988)：鉄観音，中国農業百科全集「茶業巻」，農業出版社（北京）p, 294.
- 4) 竹尾忠一，津志田藤二郎，P.K.Mahanta，田代正樹，今村義成(1983)：烏龍茶と紅茶の香気に関する食品 化学的研究，茶試研報，No.60, 91-180.
- 5) 林馥泉 (1956)：烏龍茶及包種茶製造学，第2章，台湾省農林庁茶業伝習所，p.5-10.
- 6) 吳振鐸(1991)：閩台適製半発酵茶類四個地方名種の比較，福建省茶葉学会，福建茶業（福州），p.6-29.
- 7) 吳振鐸，馮鑒淮，蔡俊明(1990)：台湾原山野生茶樹形態之觀察，中国古茶樹，中国古茶樹遺伝保護検討会論文集，上海文化出版社（上海），p.72-83.
- 8) 福建省農業科学院茶葉研究所編(1979)：茶樹品種志，福建人民出版社（福州），p.116.
- 9) 廖慶梁：「台湾の茶文化と科学」，お茶の郷講演会講演要旨，2000，7月.
- 10) 吳覺農主編(1990)：淡水庁志，中国地方志茶葉歴史資料選輯，農業出版社（北京），p.363.
- 11) 蔡盛林総編(1988)：青心大冇，中国農業百科全集，「茶業巻」，農業出版社（北京），p.265.

最後に本稿をまとめるにあたり、元台湾茶